



誠風中だより

令和7年9月29日

No.6

[泉大津市立誠風中学校ホームページ](#)



学校ホームページ
(QRコード)

めざす生徒像：「自律」と「尊重」と「創造」の身についた生徒

「自律」自ら考え、自分で判断し、自分で決定し、自ら行動できる力 ・ 「尊重」多様性を受け入れ、対話を通して
対立やジレンマを解決する力 ・ 「創造」問題を解決するために情報や技術等を活用し、新たな価値を生み出す力

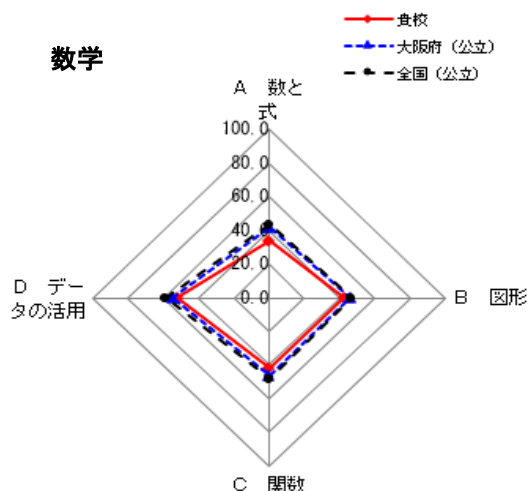
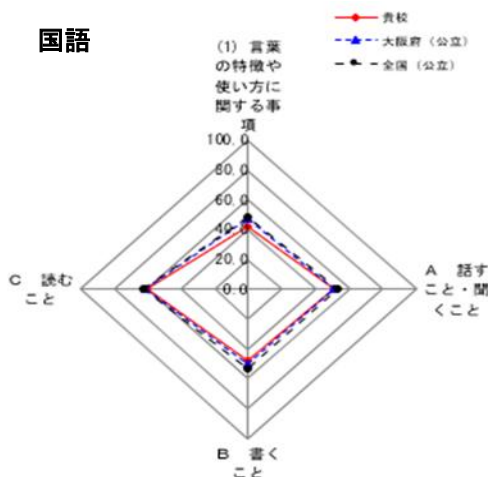
★令和7年度 全国学力・学習状況調査結果と分析について（ご報告）

令和7年4月17日に実施された全国学力・学習状況調査の結果と分析についてお知らせします。

全国学力・学習状況調査は3年生が対象で、国語、数学、そして3年に一度の理科、また学習や生活の様子を尋ねるアンケート（生徒質問紙）が実施されました。

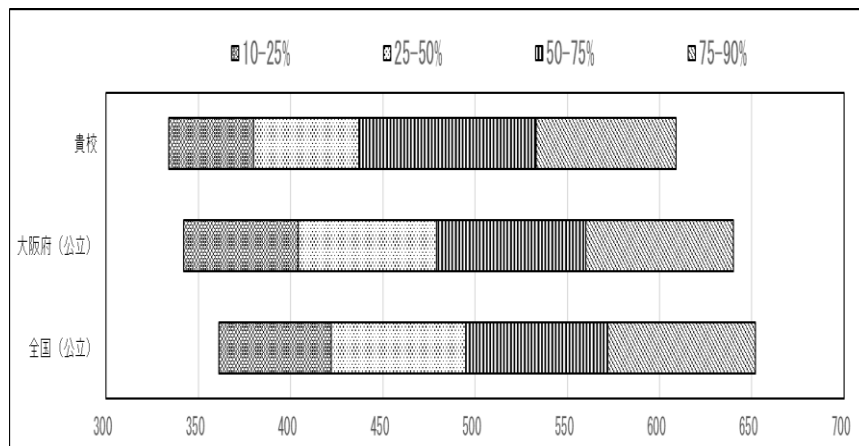
【全国学力・学習状況調査結果】

いずれの教科も、平均正答率は、大阪府平均（公立）・全国平均（公立）を下回っていました。下の図は各教科の学習指導要領の内容の平均正答率の状況、理科についてはIRTスコア分布状況を示しています。



理科

IRTスコア分布グラフ（パーセンタイル値：10%, 25%, 50%, 75%, 90%）



※中学校理科は ICT 端末等を用いた、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式（以下、「CBT」【= Computer Based Testing】とする）で実施されました。
※IRT とは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。
※IRT スコアとは IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すものです。

【数学科】

今年度の学力学習状況調査では、大阪府の平均正答率を6ポイント、全国を7.3ポイント下回りました。

図形に関する問いについて図形に関する知識内容は全国を上回っていますが、一方で、知識及び技能を測る問題で、数と式の素数の意味や、関数の増加量を求めること、データ活用の相対度数の意味を理解しているかなど、語句の意味理解について定着できていないことがわかりました。また、思考判断表現を測る問題では、図形やデータ活用に関する問題について、ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明したり、データを読み取り判断理由を数学的な表現を用いて説明したりすることに課題が見られました。記述式の問題に対しての無回答率も高く、今後、授業内での記述を必要とする問いの設定や、理解した数式や法則などを活用して自らの考えを問う課題の設定を意識して行っていきます。

○成果が見られた問題

教科	問題番号	平均正答率 (%)			無解答率 (%)	問題の概要	出題の趣旨
		誠風 中	大阪府 (公立)	全国 (公立)			
数学	3	60.3	60.7	58.1	1.9 (2.0)	△ABCにおいて、∠Aの大きさが50°のときの頂点Aにおける外角の大きさを求める	多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる

●指導の改善が求められる問題

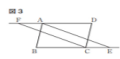
教科	問題番号	平均正答率 (%)			無解答率 (%)	問題の概要	出題の趣旨
		誠風 中	大阪府 (公立)	全国 (公立)			
数学	1	17.7	31.2	31.8	1.9 (0.7)	1から9までの数の中から素数を全て選ぶ	素数の意味を理解しているかどうかをみる
	4	24.4	33.9	34.7	10.5 (8.0)	一次関数 $y = 6x + 5$ について、 x の増加量が2のときの y の増加量を求める	一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、 x の増加量に対する y の増加量を求めることができるかどうかをみる
	5	33	36.5	42.5	9.6 (9.4)	ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める	相対度数の意味を理解しているかどうかをみる
	9(3)	24.4	33	33.2	44.0 (31.5)	平行四辺形ABCDの辺BC、DAを延長した直線上に $BE = DF$ となる点E、Fを取り、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分AEの交点をHとしたとき、四角形AGCHが平行四辺形になることを証明する	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる

具体的な設問例 大問9(3)

平行四辺形ABCDの辺BC、DAを延長した直線上に、 $BE = DF$ となる点E、Fをそれぞれとる。さらに、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分AEの交点をHとしたとき、四角形AGCHが平行四辺形になることを証明する。

(正答の条件)
次の(a)、(b)、(c)とそれぞれの根拠を記述し、証明しているもの。
なお、ここで根拠として求める記述は、正答例に記述されている程度のものである。
(a) $AG \parallel HC$ (b) $GC \parallel AH$ (c) 四角形AGCHは平行四辺形である。

(注) 図の置きかたにより、平行四辺形ABCDの辺BC、DAを延長した直線上に、 $BE = DF$ となる点E、Fをそれぞれとる。



このとき、四角形AGCHは平行四辺形になります。このことを、図のように証明できます。

解題例
平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、
 $AD \parallel BC$ ①
よって、 $BE \parallel DF$ ②
平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、
 $AD = BC$ ③
仮定より、 $BE = DF$ ④
①、②より、 $AD + BE = BC + DF$ ⑤
③、④より、 $AE = CF$ ⑥
⑤、⑥より、 $AG = CH$ ⑦
⑦より、 $AG \parallel HC$ ⑧
⑧より、 $GC \parallel AH$ ⑨
⑧、⑨より、四角形AGCHは平行四辺形である。

さらに、図の置きかたにより、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分AEの交点をHとすると、四角形AGCHは平行四辺形になります。

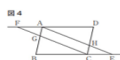


図4において、四角形AGCHが平行四辺形になることは、2組の向かい合う辺がそれぞれ平行であることを示すことで証明できます。四角形AGCHが平行四辺形になることを証明しなさい。ただし、四角形FCEAが平行四辺形であることをすでにわかっていることとします。

解答の分析

無解答率31.2%

正答例 正答率33.8%	平行四辺形ABCDの向かい合う辺は平行であるから、 $AB \parallel DC$ よって、 $AG \parallel HC$ ① 平行四辺形FCEAの向かい合う辺は平行であるから、 $FC \parallel AE$ よって、 $GC \parallel AH$ ② ①、②より、2組の向かい合う辺がそれぞれ平行であるから、四角形AGCHは平行四辺形である。
誤答例	①四角形AGCHは平行四辺形であるから、 ②向かい合った2組の辺が平行だから、四角形AGCHは平行四辺形である。

○誤答例の解説

- ①「四角形AGCHは平行四辺形である」という結論を、根拠として用いて証明したと考えられる。
②結論を導くために必要な条件はとらえられているが、根拠を明らかにして表現することができなかったと考えられる。

指導改善のポイント

- 事柄が成り立つことを証明できるようにするためには、仮定や仮定から分かる事柄、結論を導くために必要な事柄を明らかにするなどして証明の方針を立て、その方針を基に推論の過程を数学的に表現できるように指導することが大切である。

【理科】

今年度より全国学力学習状況調査理科では、タブレット端末を用いて調査が行われました。IRTスコア分布グラフから大阪府、全国より下回っていることがわかります。

「生命」「粒子」に関する知識の定着については大阪府平均を上回っており、全国とも僅差でした。一方で、思考判断表現を測る問題において、身の回りの事象から生じた疑問や見出した問題を解決するための課題を設定したり、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを自己の言葉で表現することに課題が見られました。また、元素を記号で表す基本的な知識について課題も見られました。今後、基礎の知識となる語句について押さえるとともに、身についた知識が探究的な学びを通して活用する力へと伸長するよう、探究的な学びや振り返りと共有の学習場面を設定するなど日常に関わる学習内容に生徒が主体的に取り組めるよう授業改善を行っていきます。

○成果が見られた問題

教科	問題番号	平均正答率（％）			無解答率（％）	問題の概要	出題の趣旨
		誠風中	大阪府（公立）	全国（公立）	誠風中 （全国）		
理科	7(2)	50.5	49.7	51.6	0.0 (0.2)	消化によってデンプンがブドウ糖に分解されることと、同じ化学変化であるものを選択すること。	分解に関する身近な事象を問うことで、これまでに学習した理科の知識及び技能を基に、化学変化の分解の知識が概念として身に付いているかどうかをみる。

●指導の改善が求められる問題

教科	問題番号	平均正答率 (%)			無解答率 (%)	問題の概要	出題の趣旨
		誠風中	大阪府 (公立)	全国 (公立)	誠風中 (全国)		
理科	1 (2)	30.7	40.2	46.2	16.6 (8.0)	理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのかな?』という疑問を解決するための課題を記述する	身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる
	1 (3)	25.0	33.5	36.2	2.4 (0.6)	地層 1 から地層 4 までの性質から、水が染み出る場所を判断し、その場所を選択する	露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈できるかどうかをみる
	1 (5)	28.8	45.6	44.9	22.6 (8.5)	塩素の元素記号を記述する	塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる
	1 (6)	67.0	73.8	79.4	19.3 (9.9)	水道水と精製水に関する 2 人の発表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する	科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる

具体的な設問例 大問 1 (6)

科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる。

[illegible]

解答の分析

無解答率9.7 %

(正答の条件)

次の (a) と (b) ~ (e) のいずれかを満たしているもの

- (a) 水道水や精製水に対して振り返る表現となっている。
 (b) Bさんの視点を参考に、疑問に感じることや、調べてみたいことを記述している。
 (c) Cさんの視点を参考に、はじめの考えから考えが変化したことを記述している。
 (d) Dさんの視点を参考に、身近な生活とのつながりについて感じたことを記述している。
 (e) Bさん、Cさん、Dさん以外の視点を記述している。

探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現することができている。

正答例

(正答率：79.6%)

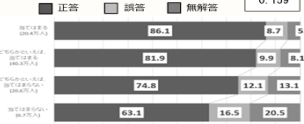
- ・精製水は水道水を蒸留したりろ過したりして、つくられることが分かり、ミネラルウォーターはどのようにしてつくられているのかについてさらに疑問を感じたので、調べてみたいと思いました。
- ・最初は、水道水と精製水の性質に大きな違いがないと思っていましたが、それぞれつくり方など大きな違いが実際にあるという考えに変わりました。
- ・コンタクトレンズの保存液に精製水と書いてあったので、身近な生活とのつながりがあることが分かりました。

無解答の反応率は9.7%である。無解答の中には、探究の過程を通して何を振り返ればよいのかが分からない生徒がいると考えられる。これまでの調査の記述式の反応率と比べたとき、本設問の無解答の反応率は低い。このことは、振り返りを記述する活動が継続的に実践されている成果が表れたものであると考えられる。

34

クロス分析

生徒質問調査 × 本設問の正答率

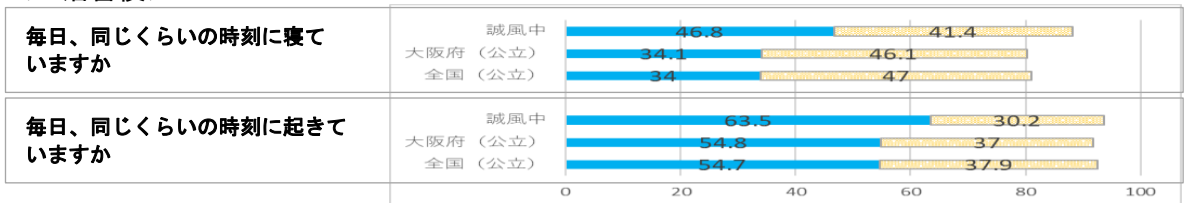


この質問に肯定的に回答したグループの方が、大問1(6)の正答率が高く、無解答率も低い。

【生徒質問紙の回答状況】

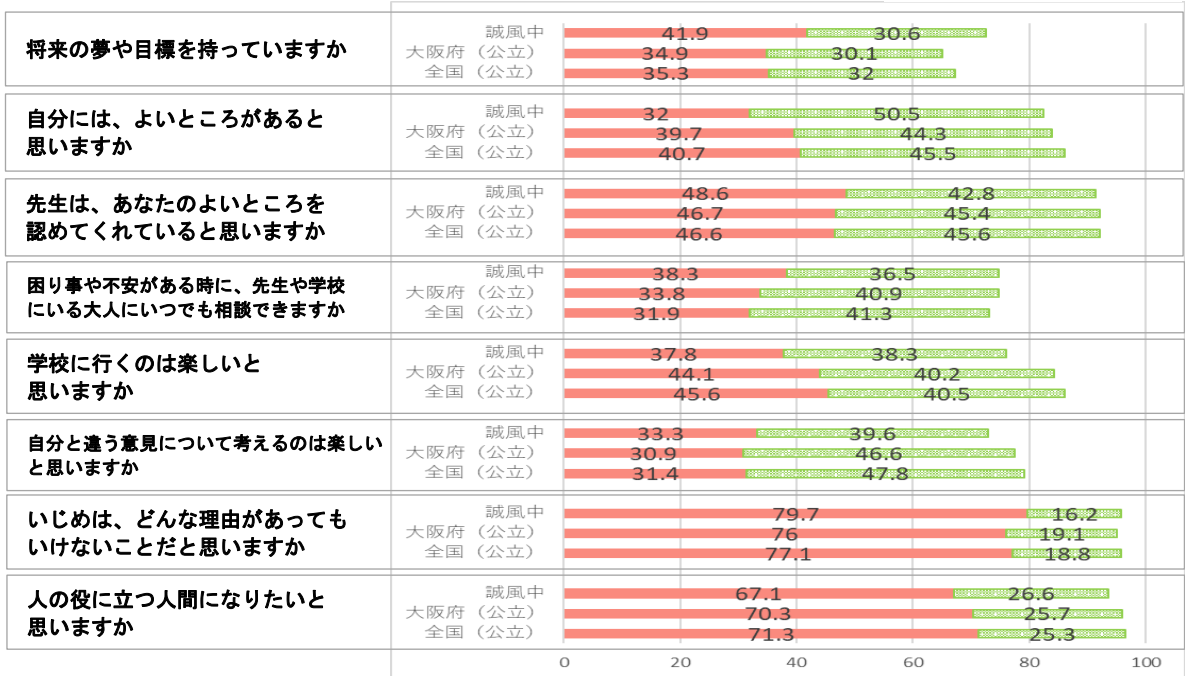
<生活習慣>

■ 強い肯定 ■ 弱い肯定



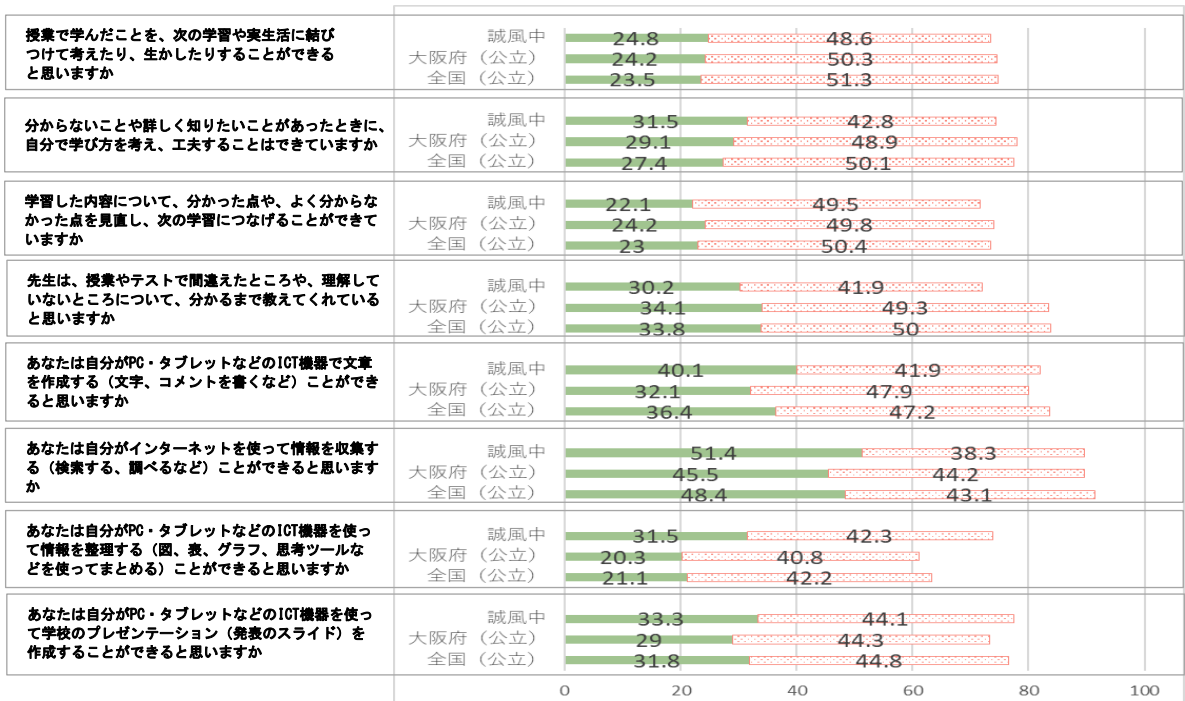
<自分自身と学校生活>

■ 強い肯定 ■ 弱い肯定

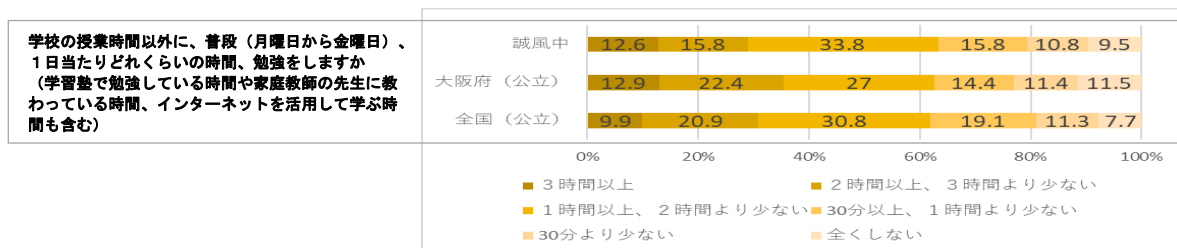


<学びとICTの活用>

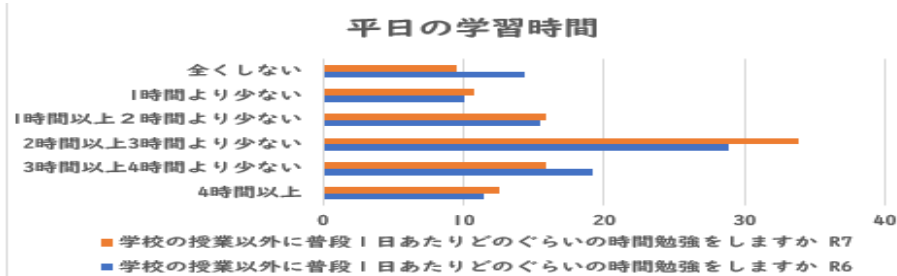
■ 強い肯定 ■ 弱い肯定



<学習時間>



《参考》学習時間に関する本校昨年度比較



<生活習慣>に関する項目から、本校生徒が、大阪府平均、全国と比べ、家庭で生活リズムを保ち、規則正しい生活を送っていることが伺える。

<自分自身と学校生活>に関する項目から、夢を持ち、学校生活の中で、教職員と信頼関係を育みながら自己を見つめ認める活動や他者との対話活動を経て、考え方を広げる力をつけている姿が伺える。

<学びとICTの活用>に関する項目から、学んだことをつなげたり、工夫したりしてこうとする姿勢がみられる。肯定的な回答の一方で、どのように学習すればよいか、自分に合った学習方法が見つからず伸び悩んでいる生徒がいることも伺える。

<学習時間>に関する項目や昨年度との経年比較から、「全くしない」と回答する生徒は減少し、家庭学習の時間が増えていることがわかる。

【総括】

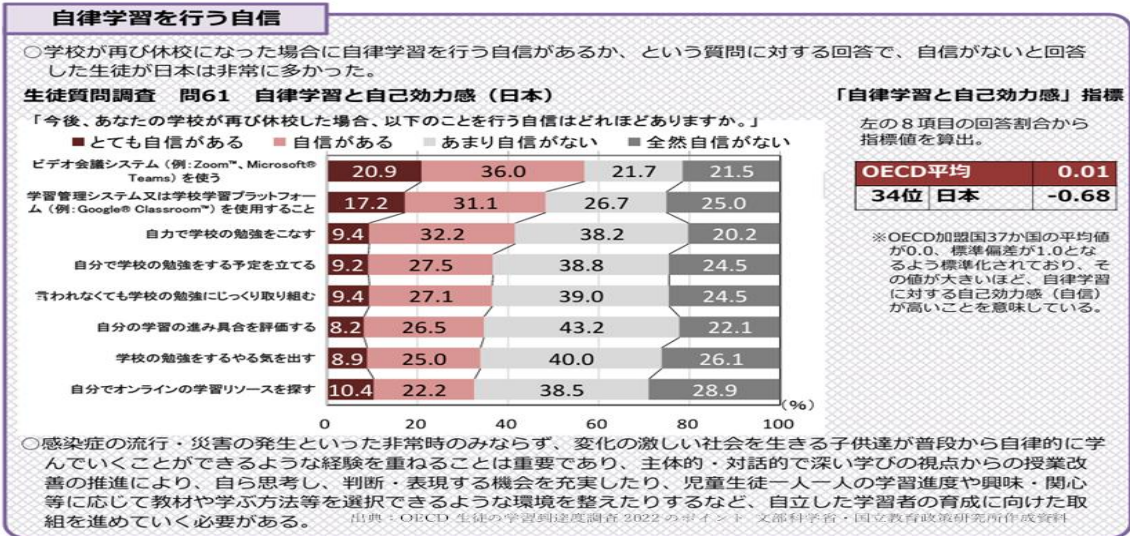
本校では、この数年間生徒に対し「指導する」ことを「支援する」ことへと転換してきました。そのため、生徒たちには「どうしたの?」、「自分はどうしたいの?」、「そのために先生はどんな手助けをしたらいい?」という対話を大切にしてきました。その根底には、指示されて行動することよりも自らの意志で行動することは、「**自ら考え、判断し、決定し、行動する力**」＝「**自律する力**」としてこれからの不確定な予測できない時代には必要な力であり、学校生活を通して育みたい力の一つとして位置づけてきました。

本年度の調査結果において、この「自律する力」が学校の生活場面だけでなく、学習場面においても見られました。本調査対象の3年生は、1年生の頃から定期テスト（決まった時期に複数教科のテストを実施）から単元テスト（学習事項の定着を都度確認）方式に変換した学年です。加えて、本校の授業研究テーマは「知的好奇心を多様な形で引き出す、問い、対話、振り返りによる授業づくり」と設定してきたことから、3年生は、知りたいことを知る工夫、学習時間、ICTを活用してまとめる力などに自信があることが推察されます。また、将来の夢や目標があることから、子どもたちの力強さが伝わってきます。

※自ら学習する力（自学自習）は、国際調査からも日本の子どもの課題となっています。また、子どもが頑張る力を発揮するには「家庭からのサポート」という点で子どもとのかかわりの大切さも指摘されています。（後に記載の〈参考1・2〉をご覧ください）

自己肯定感・学校に行くのは楽しい等については学期ごとに状況をつかんでいます。
学習課題解決に向けて、生徒の学習実態や実情に基づいた学習の個性化や個別最適な学びとして授業やサポチャレタイム・放課後自主学習教室を活用し、生徒の気持ちや考えを大切にしながら確かな学びを身につけられるよう、生徒が自ら考え主体的に学んでいくよう、保護者の皆様と連携した教育活動を進めてまいります。引き続きご協力・ご支援をお願いいたします。

〈参考1〉



PISA(Programme for International Student Assessment)調査について
PISA調査は義務教育修了段階の15歳の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることを目的とした調査。
2022年に実施され、81か国・地域から約69万人が参加。我が国では、全国の高等学校、中等教育学校後期課程、高等専門学校の1年生のうち、国際的な規定に基づき抽出された183校、約6000人が調査に参加。
調査分野（数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシー）全てにおいて日本は世界トップレベルの結果。

〈参考2〉

